

---

# 鈴の音の少女

藤白竜胆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鈴の音の少女

### 【Nコード】

N0114P

### 【作者名】

藤白竜胆

### 【あらすじ】

黄昏に棲まう者の物語。

眠りへの誘いを司る、一族の姫は現在、現実逃避中。

妙な力を持ってしまったなうなんてもんじゃないのですが、姫さんに自覚はないようです。

朗らかな姫は、さては一族の冷酷さに染まるのでしょうか？

一話完結の短編集形式となっております。

(前書き)

prologue

また、取り込まれてしまったみたいね。

黒の少女は諦めに似た溜息を吐く。横に立つ青年は、無限ループの階段に混乱しているようだ。

さて、どうしましょうか。

少女は左手に握った鈴を、リン、と鳴らす。

いつも通り。ヘルパーとして勤務している病院から帰ろうとしていると、同僚でもある学生（実習生）の青年と鉢合わせた。

あまり仲の良いほうではない　と少女は思っている　人のだが、愛想の良い彼女のこと。おしゃべりをしながら、階段を下っていった。

『ねえ、その鈴は何？』

先程から青年が疑問に思っていた、少女の手のなかにある鈴のことだ。

「護身用。」

リン、と涼やかな音色を響かせ、目の高さまでもってくる。鈴には複雑な紋様が細工されている。

『へえ？なんで鈴なんかが護身？』

「それは、秘密。」

につこり笑いながら、これ以上は聞くなと目線で云う。

本館の二階に差し掛かった頃、張り詰めた糸に触れたような感覚で

少女は立ち止まった。

『?どうしたの?』

バツと少女は手摺りから下を覗き込み、顔をしかめる。

「あちゃあ、やっぱり巢の中に取り込まれちゃったか。」

不思議そうに、青年も階下を覗き込む。瞬間、青年は凍てついた。

地下一階迄ある螺旋階段…それが、今や底の見えぬ延々と続く階段と化している。

『な、んだこりゃあ…』

啞然としたまま、目線を2階のフロアに移す。

『と、とりあえず他の階段を使おう!なんか気味悪い。』

タツと駆け下り、皮膚科受け付けの前に立つ青年。

「…無駄だと思っただけど…」

少女は溜息を吐きながら、青年の後を追う。その際、鈴の音を響かせることを忘れずに。

皮膚科を横切り、検査室の前の階段を下る。段々鈴が鈍く、耳障りな音色を奏で始める。

「…キタ。」

いつもの朗らかな少女とは到底思えない、けだるそうなうんざりした表情を浮かべる。巻き込まれた青年は、たまったもんじやないだろう。

ズッ、ズ、ザリッ…。

階下から響いてくる足音。職員なればいざ知らず。こんな這いずるような音は、職員である可能性は皆無に等しい。

「…つえ…あ、キノ、さん？」

ふらふらと壁に手摺りに打ち当たりながら現れたのは、顔面蒼白の老婆。

「今朝、亡くなった人ね。」

焦点の合わない瞳で老婆は二人を見つめる。

「橋を、渡りなさい。さもなくば…わたしは…」

リーーン！強く強く響き渡る鈴の音。

その音に、老婆の体が、怯えるように、びくり、と震える。

ビキッ。

「…残留思念の強き者、気を持って人を殺めん、か。」

罅の入ったブレスレットの石を眺めながら、少女は呟く。

早く、畢らせなければ。

この砕けた石は、わたしの身代わり。

「“トリニティ”」

砕けた石から光が現れ、白い死神をかたどる。白の鎌が舞踊ると、老婆の姿は消え失せた。

「“死”の呪縛の地に…眠りの音を。」

リーーン。澄んだ涼しい音色の鈴が、舞う風に乗せて鳴り響いた。

「アレは自分の死を認めず、生きたい思いが強すぎて、察知・消去しようとした私に殺気を放ったようです。しかし、浅はかだった。地鎮めの末裔に叶うわけがないのに。」

《ほう、漸く一族の宿命を受け入れてくれるか。耀よ。で？一緒にいた青年は？》

「受け入れはしません。しかし、務めは果たす義務があります。あの人には、忘れて頂きました。」

『な、な、なんだアレ…き、君も一体…』

「地鎮めの鈴。」

リン。

鈴の音と共に、青年の意識がなくなる。

「…申し訳、ありません…。」

彼の頭に手を置き、そして軀を揺さ振る。

「幹久さん、幹久さんてば。起きてください、風邪引きますよ？」

『…う、ん？あれ、俺なんで…』

「どうしたんですか？踊り場なんかで蹲っちゃって。ビックリしましたよー。」

につこり笑って云う少女に、彼は口を開く。

『なんか、変な夢見た気がするんだけど…なんだったんだろ…』

少女は更に笑顔を被せる。

「病院ですから。変な夢を見ても、頷けるんじゃないですか？」

そういつて、立ち上がる。

「さ、帰りましょ？もう9時回りますよ。」

差し出された手を、青年が握ると、少女は唇の動きだけで“ごめんね”と呟いた。



（後書き）

十星司耀 ほしつかよ

黒の使者。地鎮めの一族の次期当主。普段は朗らかで、愛されキャラな介護士。

十幹久悠 みきひさはるか

自覚が無いようだが、霊媒体質。リハビリ科にインターンとしてお世話になっている模様。

準夜勤帰りに突発的に思いついた話。制作15分@電車内…。  
06 / 11 / 23

以前、己のHPに載せていたものになります。  
構想は出来ているけれど、次の話を仕上げるのがなかなか…時間が足りません…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0114p/>

---

鈴の音の少女

2010年11月20日00時36分発行